

シソ科キランソウ属の多年草。本州以南の山里、道端、公園など、特に背の低い植生のところに生える。日当たりがよく、排水が良好なところを好み、石垣の間などにもへばりつくように広がる。茎は立ち上がりず地表を這い、草全体がロゼット状に地表に広がる。背が高くなっても 20cm 程度。シソ科には珍しく茎の断面は丸い。葉は対生し、長さ 2-6cm、長楕円倒披針形で葉腋に濃紫色の花を数個ずつつける。花期は春から初夏、径 5-10mm の唇形花で上唇は下唇よりごく小さい。下唇は 3 裂して大きく広がり、特に中央の裂片が長く突き出し、中央が切れたように浅く 2 裂する。日当たりの良いところでは冬から花が咲いていることもある。

キランソウの別名をジゴクノカマノフタ（地獄の釜の蓋）という。これは根生葉が地面に張り付いて広がっているのを地獄の釜の蓋に見立てたとか、薬草としての効果が強く地獄の釜に蓋をするほどにまで病を治してしまうからとか、由来が説明されているが、こんな話があるのはほとんど知られていないようだ。

あるところに鬼疋村^{おにびき}という村があった。その村の集落のはずれに古びた丸い鉄製の蓋が被せられた穴があった。蓋が被せられる前の穴は、直径 1m 足らずで、深さも 70cm ほどのすり鉢状の丸底の穴で、不思議なことに雨が降っても水がたまることはなく、穴の周辺はキランソウが覆いつくし縁に草は生えても底に生えることはなかった。

その穴は子どもたちの格好の遊び場であった。ある時、子どもたちがその穴で遊んでいたとき、厳つい赤ら顔で髪が逆立った大男がやってきた。太い声で「退け！」という子どもたちは穴から飛び出した。子どもたちの代わりにその大男が穴へ飛び込むと、穴の深さは 70cm ほどだったはずだが、その赤ら顔の大男の姿はどんどん見えなくなり、子どもたちが穴をのぞき込むとその大男は穴の底からずぶずぶと土の中に沈み込んでいくのがわかった。そして上へ伸ばした右手が最後に沈み込むと、子どもたちは「ウワァー!!」と叫んで逃げていった。

須藤 健一

子どもたちが大人たちと一緒に戻ってきたときには、その穴はいつもと同じように丸くて深さは 70cm ほどのままであった。穴の底を棒で突いて、試しに穴へ飛び込んでみたら沈み込んだりすることはなかった。こんな不気味な穴をそのままにしておくことはできないと、土で埋めたが翌日になると埋めた土はどこへいったのか 70cm の穴に戻ってしまっていた。

穴を埋めるということを何度か繰り返したがいつも元に戻ってしまった。そのうち、この穴の下には地獄があって、穴を埋めた土は地獄に落とされて針山を高くするのに使われているとか、穴に溜まった水は地獄に吸い取られて釜ゆでの湯に使われているのとか、穴に飛び込んだ赤ら顔の大男は地獄の閻魔に仕える鬼だったに違いないとか噂されるようになった。そうして村人たちは、地獄から鬼が戻ってきたら困るというので、その穴に大きな鋳物の鉄の蓋を被せた。その蓋には周りに生えている「キランソウ」の絵を彫り込み、鬼を封じ込めることにした。

鬼疋村は疾の昔に廃村になったが、キランソウを彫り込んだ「地獄の釜の蓋」は今も残っているということである。

